

本書は『近代日本の大学と宗教』（法藏館、二〇一四年。以下、これを本書に倣い「前作」とする）の続編として編まれた論文集である。『近代日本の大学と宗教』が日本の近代化過程に焦点をあてたのに対して、本書は「近代的な領域として形成された大学および宗教は、戦時下において如何なる現実を迎えたこととなつたのか」（ii頁）という問題関心の下で、アジア太平洋戦争期における「宗教の研究」

と「宗教者の教育」の実態解説が意図されている（i頁）。本書の構成は以下の通りである。

はじめに

第一章 総力戦体制下における教育・学問・宗教
（江島尚俊）

第二章 大学における日本主義——日本近代化における歴史哲学試論——
（江島尚俊）

第三章 戦時下の上智大学——カトリック系大学はいかに「日本精神」と取り組んだか——（ケイト・ワイルドマン・ナカイ／田中アユ子・訳）

第四章 近代における日蓮宗の僧侶養成と大学教育
（安中尚史）

第五章 戦前期の神道系大学における神職養成
（藤本頼生）

第六章 立教大学と聖公会神学院の二重学籍制度
（大江 満）

第七章 敗戦前キリスト教系大学における教育組織・カリキュラムの変容について——高等学校高等科教員無試験検定指定をめぐつて——（奈須恵子）

第八章 「社会」と対峙する仏教学——戦時下における大正大学を中心にして——（三浦 周）

第九章 戦前戦中期における宗教系大学の慰靈・追悼

——大正大学を事例として—— (寺山賢照)

第十章 戦時下的日本基督教団と神学校の統合

(齋藤崇徳)

本書は仏教、神道、キリスト教(カトリック・プロテス
タント)をその対象としている。評者は、教育史を専門と
し、戦時下的キリスト教主義学校を研究対象のひとつとし
て設定しているが、キリスト教以外の宗教系学校に関する

研究が必ずしも多くないこと、そして複数の宗教を対象と
した研究がほぼ皆無であることが研究上の課題だと考へて
きた。構成からも明らかなように、複数の宗教を対象とし
たことは本書の最大の特徴であり、まずこの点に本書の意
義を認めることができるだろう。

「まえがき」によれば、この構成は、前半部分に「抽象
度が高い論稿」を、後半部分に「具象度が高い内容」を配
置しているとのことである。明確には記されていないが、
第一章と第二章が前者、第三章から第十章が後者にあたる
と考えられる。

第一章と第二章は、本書が対象としたアジア太平洋戦争
期の特徴を近代化の文脈のなかで位置づけようとするもの
である。

第一章「総力戦体制下における教育・学問・宗教」(江
島)では、総力戦体制の本質を機能性追求の動員システム

本に関する科目的導入に積極的ではなかったことを指摘し
ている。また、学術研究においては、日本に関する研究や
日本史としてのカトリック研究がなされていたことを明ら
かにしている。なお、カトリック系の学校では、高等教育
機関だけでなく、初等・中等教育機関においても、その目
的に宗教的な要素を取り入れていないうことが特徴であつ
た。イエズス会の教育に対する考え方についての理由の一端を
確認できる論稿である。

第四章「近代における日蓮宗の僧侶養成と大学教育」
(安中)では、日蓮宗における僧侶養成と宗門立の高等教育
機関である日蓮宗大学・立正大学との関係を考察してい
る。明治以降、近代的な学校制度の下で僧侶養成が行われ
ていたが、一九三七年に修練の場としての「信行道場」が
設けられ、これが日蓮宗の僧侶になるための必須条件とさ
れたこと、さらにそこでの訓育が配属将校らによって軍隊
教育との一致し、「日本精神」に適うものとして評価され
たことを紹介している。

第五章「戦前期の神道系大学における神職養成」(藤本)
は、「非宗教」であるとされ、前作では章を立てて論じら
れなかつた神道を取り上げたものである。皇典講究所によ
る神職資格である「学階」に注目し、それが「国学に關す
る学力」の検定によって与えられるものであることをふま

として捉え、人間を資源化するためには「精神労員」が必
要であったと指摘する。それゆえ、近代化過程において独
立した領域として形成された教育・学問・宗教は、総力戦
体制構築のために「天皇」を基準としながら資源化され
(読み替えられ)、機能的に位置づけなおされることになっ
たと論じている。

第二章「大学における日本主義」(松野)では、ウォーラ
ースティンの「世界システム」論などをふまえ、戦時下の
日本において、宗教的 세계觀ともいえる天皇論が大学とい
う近代的空間を覆つたのは「世界史的」近代の受容の結果
であったとの視点を設定する。この視点から、天皇という
存在を通して「歴史」と「世界」を理解することが戦時
の概念枠であつたと指摘している。そして、近代日本の「大
学と宗教」という観点からこれを捉えなおすと、大学の概
念枠として日本主義が機能したことは、天皇という存在が
日本の近代化に貢献し、近代と融和性の高かつたことを示
すものであると結論づけている。

第三章から第十章は、個別の大学・専門学校を対象とし
た事例研究である。

第三章「戦時下的上智大学」(ナカイ)は、戦前期のカト
リック系大学として唯一の存在であった上智大学における
「日本精神」への取り組みについて検討し、教育面では日

え、これと國學院大學での教育との関係を考察したもので
ある。また、戦時下的神道系大学の学生の状況を國學院大
學と神宮皇學館大学を事例として紹介している。

第六章「立教大学と聖公会神学院の二重学籍制度」(大
江)は、プロテスチント系キリスト教の教派である日本聖
公会の聖職者養成機関であった聖公会神学院と日本聖公会
と関係の深い立教大学の間で存在した二重学籍制度につ
いてとづけたものである。二重学籍制度の廃止を聖公会神
学院と立教大学(立教学院)の首脳陣と日本聖公会内部にお
けるプロテスチント教会と合同派と非合同派との重なりのな
かに見出している。

第七章「敗戦前キリスト教系大学における教育組織・カ
リキュラムの変容について」(奈須)は、キリスト教系の四
大学(同志社大学、立教大学、上智大学、関西学院大学)の
教育組織とカリキュラムの変容を高等学校高等科教員の無
試験検定の指定という視点から考察し、文部省からの統制
とそのあり方の変化を明らかにしたものである。資料の関
係から対象時期が一九二四年から一九三九年までに限定さ
れているが、キリスト教系大学では宗教教師の養成と関係
が強い宗教学科や神学専攻では無試験検定の指定を受ける
ことができなかつたことが、仏教系大学との決定的な違い
として指摘されている。

第八章と第九章では、大正大学が事例として取り上げられている。

第八章「社会」と対峙する仏教学」(三浦)では、非社会的存在であつた仏教・僧侶が社会的存在へと変化する転換点として大学を位置づけ、大正大学を対象として「大學」における「仏教学」が社会とどのように対峙したのかを考察したものである。戦時下に設置された皇道仏教研究所と東亞学科を「社会的風潮によって歪曲された学問・研究の具体例」として位置づけ、「社会的責任の所在を明確にしないまま進められる仏教の社会対応」として評価している。

第九章「戦前戦中期における宗教系大学の慰靈・追悼」(寺山)は、宗教系大学における慰靈・追悼を概観しつつ、大正大学を事例としてその実態と変化を検討したものである。大正大学では、一九二六年に開学した当初から学内で慰靈・追悼法要が行われ、これを学生思想問題などへの対応として学生への訓育の一環としても位置づけていた。このようなあり方は、国民精神総動員運動や報国団の結成を機に転換し、高等教育機関としての指導的人材の育成だけでなく、一般国民に対する教導的な役割期待に応えようとするものへと変質したことを探している。

第十章「戦時下の日本基督教団と神学校の統合」(齊藤)

を、一九三五年以降の教学刷新において知識教授よりも修練や修養が重視されていたとの第一章の指摘と接続することによって、宗教と教育の動向の重なりを確認することができます。このほかにも、第六章と第十章は、ともに宗教教師養成を目的とした専門学校を対象としている点で共通している。第六章で取り上げられた聖公会神学院は、日本聖公会が日本基督教団に参加しなかつたがゆえに、宗教政策上このような宗教教師養成機関を認めることは不適切であると認識され、文部省によつて学校の廃止が勧奨されている。これに対して、第十章で取り上げられた日本基督教団の神学校は、教団に参加した宗派の神学校を統合して発足したものである。ふたつの論稿によつて、教団に加わつた教派と参加しなかつた教派の神学校の違いが明らかになるとともに、文部省とキリスト教関係学校政策の一端を確認することも可能だろう。

しかしながら、「はじめに」において、「原則として、著者ごとの問題設定に基づき各章が執筆されている」(ii 頁)、「本書では『大学と宗教』を共通のテーマとしつつも、各々の視点や方法に基づき、様々な対象がとりあげられている」(vi 頁)ともエクスキューズされているように、本書は全体を貫く視点や方法を欠いている。また、第一章は「戦時日本の大学と宗教」を俯瞰する見取り図の役割を

は、日本基督教団の発足をうけて、一九四三年に日本基督教団の神学校が発足したことの意義を明らかにし、宗教教師の養成や宗教研究を行う高等教育機関と教会との関係性やその役割を考察したものである。日本基督教団の神学校の発足の意義は、日本唯一のプロテスチント教会と制度的につながり、日本のために貢献するほぼ唯一の神学校という構造が成立したことにより、そのことによつて当時の國家的事業への直接的な回路が示されたと指摘している。このように本書で取り上げられたテーマや方法は多様である。このうち、第四章、第五章、第六章、第七章、第八章、第十章は宗教教師の養成に関する論稿、第三章、第七章、第八章、第九章は社会との関係において大学と宗教をとらえようとする論稿とみなすことも可能であろう。

それぞれの論稿では新たな事実の発掘や視点・視座が示されており、本書は教育・学校と宗教に関する研究を進めようそれでも貴重な一冊になるはずである。また、それぞれの論稿には相互に関連する内容も含まれており、このことは本書の可能性としても指摘できよう。

たとえば、第三章で取り上げられた立正大学では、知識偏重が批判され、修養の場としての「信行道場」が設けられたことが明らかにされた。このことは、第九章で取り上げられた大正大学における行の重視とも重なり合う。これ

坦つているようであるが(四〇頁)、その見取り図の中に各論稿が位置づけなおされていないことが悔やまれる。

大きな見取り図の中に各章を位置づけ、新たな研究課題を提示することが書評の役割なのかもしれないが、それは評者の力量を大きく超えている。その点をお詫びしつつ、本書に触れて考えたことを記すことにしたい。

本書が対象とした「戦時下」という時代については、「はじめに」において、「近世期から継承されてきたものの十把一絡げに再編していくのが戦時下であった」(ii 頁)と捉え、またそれが特異な時期であったのではなく、日本の近代化という文脈の中で連続的に捉える必要があることが第一章や第二章で指摘されている。これに対して、本書が対象とした「大学」という場については、「はじめに」において近代的な領域として形成されたものとして記されているものの(ii 頁)、その制度的な特徴は、自明のこととされているのか、必ずしも明確ではないように思われる。本書のテーマが戦時下という時代と大学という場の交点において設定されているのであれば、大学制度をどのようにとらえるかということは重要だと思う。

大学令制定時の文部省専門学務局長であつた松浦鎮次郎は、日本における大学は、ヨーロッパの大学と異なる世俗

のものであり、宗教を学問研究の対象として取り扱うことは認められるが、宗教を信仰の目標としてその教理の枠の中でこれを研究することは認められず、また宗教教師の養成も認められないと述べている。そして、大学の認可にあたつても、この考え方は維持されていた。大江が、第六章の冒頭で、「宗教大学における宗教教育は、宗教科目を科学研究の対象として扱うことは認められるが、宗教的訓練を実践する施設としては認められない」（一九九頁）と述べた所以である。もっとも、同志社大学の神学専攻が宗教教師養成機関として機能していたことを考えれば、これは建前であったということができるかも知れない。

とはいって、大学に付設された専門部の存在を視野に入れただとき、これを建前と言い切ることもできないと思われるのである。第四章では日蓮宗の僧侶養成と立正大学、第五章では神官の養成と國學院大學との関係が論じられているが、両者には大学とは別に専門学校令による専門部が付設されていた。立正大学の専門部には宗教科、国語漢文科、歴史地理科が置かれ、國學院大學には高等師範部、神職部が設置されている。このうち、國學院大學附属高等師範部の卒業生には「高等師範部卒業生（国文選科生ヲモ含ム）ニシテ礼典ヲ修了シタル者ハ銓衡ノ上皇典講究所ノ相等学階ヲ授与ス」（附属高等師範部規程第十七条）とされていた。

この規定は附属神職部の設立にともなつて廃止されたが、新たに設置された附属神職部では「神職部本科卒業生ハ皇典講究所学階授与規則ニヨリ学正ヲ授ケタル」（附属神職部規程第二十三條）と規定が設けられている。おそらく、立正大学専門部の宗教科も僧侶養成を担う組織であつたと考えられる。なお、キリスト教系の関西学院大学では、法文学部文学科に宗教学専攻が置かれたほか、専門部に「基督教教師」の養成を目的とした神学部が設置されている。こうした事実に鑑みると、宗教研究や宗教教師の養成に関する考察にあたつては、大学だけでなく専門部との関連も視野に入れたうえで、大学と専門部の目的や役割・機能の違いを視野に入れることが求められるだろう。このことは、大学が宗教教師養成の場なのか、宗教に関する学問研究の場なのかという大きな問題とも連なるようだ。そして、戦時下の宗教にとっての大学の意義を考える観点を提供することになるだろう。

ところで、谷脇由季子は、宗教を学問研究の対象とするのが大学であるという原則をもつ大学令に準拠して大学を設立することによって、宗教のもつ独自の世界観や価値観が脅かされる危険性や宗教の質的転換が迫られる可能性を指摘している（谷脇「仏教系私学における僧侶養成と学問研究との相克——大谷大学の昇格を事例として——」『日

本の教育史学』第三八集、一九九五年）。本書のテーマに即して言えば、宗教的価値とは異質な価値の理解や受容の様相を明らかにすることは、資源化され、動員される宗教の側が自らをどのように「読み替え」たのかを明らかにすることになるだろう。本書では、宗教の質的な転換という点では、皇道佛教（第八章）や日本基督教（第十章）への言及が確認できる。しかし、この転換を生じさせた大学といふ場における作用の内実の解明はなお課題として残されているようにも思われる。第八章では、皇道佛教に関してもこれを試みているように思われるが、資料的な問題もあり、必ずしも十分に深められていないようにも思われる。また、他の研究分野の動向や宗教統制が、宗教研究に与えた影響も考慮する必要があるようにも思われる。第一章では日本諸学振興委員会の役割を指摘しているが、この組織については本書の著者である奈須恵子が編者のひとりとして名を連ねる『戦時下学問の統制と動員』（東京大学出版会、二〇一一年）が貴重な先行研究として存在している。学問への統制や動員に関する先行研究との対話は、大学を起点とした宗教の質的な転換の考察に広がりと深みを与えるはずである。

旧制度下の大学が男子を対象とした教育機関であつたことに留意すべきであろう。また、専門学校には女子を対

象とした学校があつたものの、本書が取り上げた専門学校は男子を対象とした教育機関である（日本基督教団の日本女子神学校は女子を対象としているが、女子を対象とした学校であることには注目しているとは思えない）。おそらく意図してのことではないのだろうが、結果的に、本書は男子を対象とした高等教育機関のみを取り上げることになつてゐるのである。とはいえ、キリスト教系を中心に多くの宗教系の女子専門学校が存在していたのも事実である（前作には、資料として、旧制度下における宗教系高等教育機関が一覧化されている）。本書が男子を対象とした高等教育機関を対象に設定したことによつて、戦時下の高等教育と宗教をめぐる問題から性差を排除している可能性があるのではないかと危惧している。

とはいって、「大学と宗教」というテーマは、研究領域を超えて広がりをもち得るテーマであるとも思う。本書「あとがき」によれば、「大学と宗教」というテーマの現代的な意義に関する統編が企画されているようである。統編では、大きな見取り図の中に大学と宗教をめぐる諸相を位置づけてもらえることを期待したい。